
勇者って知らなかったんですマジ勘弁してください

TT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者って知らなかったんですマジ勘弁してください

【Nコード】

N0152Y

【作者名】

TT

【あらすじ】

孤児かと思ったら勇者だったというお話

1話

一言で今の状態を表すなら、転生……。

いや、あれだよ、ビックリだよ！！　なんで？　何があったら転生なんてするの？

そういえば車に轢かれたような気がする、そっか、俺死んでるわ。

納得はした、だがどうすればいいんだ、こんな小さい手になってしまつて。

あと何年かは、恥ずかしいイベントが続くんだよな？　転生の特権の。

「■■■■■、■■■■■」

あゝ、マイマザー、おはようございます。

相変わらずなんていつているのか分かりません、赤ちゃんはお腹の中に居たときから。

言葉を学ぶって言うけど俺は学んでないようです。が、がんばろう。

「サーシュ■■■■■」

サーシュたぶん名前だと思う、母はいい人だと思う、自分がかかり愛されてるってのも分かるし。

まあ、願わくばこの平和な時が続きますように。

平和な時を願ったあの日から3年がたった、言葉のほうは微妙だ

少しずつ良くなっているが

まだまだ微妙だ、今は木の陰で本を呼んでいる、本といっても木の板に傷をつけて

文字を書いているだけのものだが、ふと、顔を上げると子供が遊んでいるのが見える。

元気なのはいいことだ、だが一人だけその輪に混じれて居ない子が居る。

はあ、仕方がない。

そう思い、輪に混じれて居ないこの傍に近寄る。

近づいてくる俺に気がついたのか、こちらを見る、女の子のようだ。

「なに？」

おお、聞き取れた。

そうそう、ゆっくり話してくれば俺もわかるんだよ。

「なんで皆と遊ばないの？」

多分きちんと喋れている、と思う。

顔の表情が動かないのはいつものこと、声もすこし平坦だが気にしない。

「私は、■■だから」

少女はそう呟いた、やばい、知らない言葉だ、発音は分かっただけど、なんていったのだろう。

孤児とか、かな？　そ、そういえばこの子の両親は見たことない。それに寂しそうな目をしている。

悪いことを聞いてしまったかもしれない、だがそれが原因で一人寂しく子供たちを見ていたのだろう。

「一人は寂しくない？」

泣きそうな目になる、え、えっと、ど、どうしよう。そ、そうだ
！！

「孤児なんて関係ない、俺と友達になろう！」

その子の手を握って、目を見る、少し慌てて噛みまくってしまったがうまく言えただろう。

泣き始めてしまった。ど、どうすれば、どうすれば

「大丈夫だよ、孤児なんて関係ないんだ、ずっと、ずっと、俺の友達だから」

慌てた俺は抱きしめることにした。

女の子が泣いたら抱きしめる、大切なことだと思っています。

泣きつかれたのか女の子は寝てしまった。

取りあえずこのままだといけなそうと思ひ離れようと思つたのだが、女の子が服を握っているせいで離れられなかつた。

仕方ないのでそのまま大変だが抱き上げて最初に居た木の場所まで移動した。

移動したら疲れたので気にもたれかかつて寝ることにした。寒くなりそうなので女の子に服を掛けてあげる。

もぞもぞと何かが動いている感じがする。

「う、ん？ あ、起きたんだ」

「は、はい、えっと」

む、どうしたのだろう？ あ、そういえば。

「名前は、サーシュだよ」

「わ、私はアリアです」

へえ、アリアって名前なのか、可愛い名前だな。

「アリアだね、よろしくね」

そういつて、頭をなでる、俺も今は同じくらいだけどやっぱり子供は可愛いと思ってしまう。

「はい、よろしくお願いします、サーシュ様！！」

いい子、いい……子？

「様？」

様？ なぜ？ いや、女の子に様づけで呼ばせるってどんなだよ！！

「だ、駄目ですか？」

だ、駄目だけど、何で泣きそうなの？ ど、どうしよう

「いや、悪くない、悪くないよ！」

泣いたら抱きしめる、もう必死だ、本当にどうしてこうなった？

1話裏

私は一人だ、私は勇者だから、強いから、一人でいい。
そんなことを思いながら、同世代の子供たちが遊んでいるのを見る。

そうやって、子供たちを見ていたら近くに人が来た、笑ったところを見たことない、よく村長の家で本を写させて貰っている無愛想な子だ。

「なに？」

なんだろう、そう思って聞いてみた。

「なぜ皆と遊ばない？」

私は勇者だ、だから一人でいい、また私は心の中で唱える。

「私は、勇者だから」

そんな弦きがもれてしまった。

その弦きが聞こえたのだろう、その子が何か考え事をしている。
お母さんかお父さんに言われたことを思い出しているのかもしれない。

あの子とは遊んではいけないと。私は強いから、強いから大丈夫、
唱える、唱える。

「一人は寂しいだろ？」

関係ない、関係ない、一人でいい、私は勇者だから。

「勇者なんて関係ない、俺のものになれ！」

驚いた、上から物を言う子だと思っていたけど。

手を握られて、目を見つめられて、人の手ってこんなに暖かかったんだ。

そう思った瞬間涙があふれてきた、今までこんな風に手を握ってくれた人は居なかった。

「大丈夫だ、勇者なんて関係ない、ずっと、ずっと俺の……だ」

そういつて、抱きしめてくれた、涙が止まらない、凄く暖かくて、暖かくて。

自分のないている声で、少し聞こえなかったが、私はずっと、貴方の傍に居ます。

泣いて疲れたのか眠ってしまっていた。

暖かい、暖かい？ 少し体を動かす。あの子が木にもたれかかって寝ていた。

私はあの子にしがみ付いて寝ていたみたいだ。暖かったのは、あの子の上着が掛けられていたからだだった。

「う、ん？ あ、起きたか？」

「は、はい、えっと」

そういえば名前を聞いてない、どうしよう？

「名前、サーシュだ」

「わ、私はアリアです」

サーシュ様、ああ、サーシュ様、これからよろしくお願いします。

「アリアか、よろしくな」

そういつて、サーシュ様が頭をなでてくれます。

ああ、幸せです。

「はい、よろしくお願いします、サーシュ様!!」

「様？」

サーシュ様がこちらを見る、ど、どうしよう、何か間違っただろうか？

「だ、駄目ですか？」

「いや、悪くない、悪くないぞ！」

そういつて、抱きしめてくださる。

ああ、恥ずかしいです。サーシュ様／＼／

2話

さて、いつまでも抱きしめているわけにはいかない。
そろそろ日は沈んで、あたりが暗くなり始めている。

「アリア、君の家ってどこ？」

家の場所を聞く。

「あそこです、村長の家の隣の隣です。」

あそこか、人が住んでないと思ってたんだけど、あそこに住んでいたのか。

一人で住んでいることは確定だな、どうするべきか、子供のうちからひとりで生活なんて寂しすぎるだろう、ならばやることは一つだ。

「アリア、ついてきて」

アリアの手を引いて家に帰る。

「ただいま」

帰りの挨拶をする。

「あらあら、お帰りなさ、い？」

母さんはこちらを見て固まる、それはそうだろう、子供が家に帰ってきたと思ったら。

どこの子か分からないが連れて帰ってきたのだから。

「サーシュ、その子は孤児……よね？」

ためらうように聞いてきた。

知っていたのか、いや、大人なら知っていることなのかもしれない。

このままでは、アリアを家で暮らせることが出来ないかもしれない。いや、そんなの駄目だ。

「母さん、孤児とかそんなことどうでもいいんだ、アリアは子供で、俺と同じ子供なんだ

だから一緒にいてあげるんだ、だから！」

母さんはなんだか衝撃を受けたような顔をして、その後少し泣きそうな顔をしながら。

「そうね、そうよね、子供だものね」

そういつて、母さんが近づいてきて、アリアと一緒に抱きしめてくれた。

アリアは泣いている。

「アリアちゃん、でよかったかしら、ごめんなさい、私たち大人が間違ってたわ」

「そ、そんなことないです」

「ふふ、アリアちゃんは、いい子ね」

そういつて母さんはアリアの頭をなでている。
なんだか、一件落着いたようだ。

「母さん、アリアと一緒に暮らしてあげたい、どうにかできないかな？」

「そうね、分かったわ、明日、村長さんと話しをしてみるわ」

これで、どうにかなりそうだと、そういえば他にも孤児はいるのだろうか？

いや、今考えても仕方ない、今の俺じゃあどうすることも出来ない。
い。

いつか、孤児院を開ければいいのだけれど。

「そうだと、お腹すいてるでしょ、準備できてるわ、アリアちゃんも一緒にどうぞ」

「え、あ、えっと、でも」

アリアはもじもじして、こちらをちらちら見てくる。

「母さんが、いいって言うてるんだから、いいんじゃないの？」

「は、はい、サーシュ様／＼」

「え？　ちょっといいかしら、サーシュ」

そういつて、母さんは手招きする。

「なに、母さん？」

「ねえ、何で様づけなの？」

ああ、そのことか。

「アリアがそう呼びたいって言ったからだよ」

「そう……まあ、お母さんは、何も言わないわ」

地味にありがたいな。

「アリアちゃん、ついてきて、一緒にお食事しましょ」

「は、はい、お、お母様」

「アリアちゃん、そんな他人行儀名呼びかたしなくてもいいのよ？
お母さん、て呼んで？」

「あ、えっと、お母……さん」

「うふふ、よろしくね、アリア」

アリアは母さんに連れられていく。その顔は笑顔だ。
俺もそれを見ながらその後が続く。

二人でアリアを挟んで食事をした。

アリアはきれいに食べていた。俺が言えた事じゃないが、本当に三歳児か？

そんな感じで食事が終わる。

いまは、アリアと一緒にベットで寝ている。

今日は疲れた、外で寝たとはいえ子供には足りなかったようだ。

「アリア、おやすみ」

アリアを抱きしめる。

「はい、おやすみなさい」

そうして、一日が終わった。

2話 裏

「アリア、お前の家はどこだ？」

急にサーシュ様がそんなことを聞いてきた。
どうしてそんなこと聞くのか分からないが。

「あそこです、村長の家の隣の隣です。」

指でさし、どこら辺にあるかを教える。
すると、サーシュ様が何かを考え始める。

「アリア、ついてこい」

サーシュ様に手を引かれる、どこに行くのだろうか？

「ただいま」

サーシュ様が、帰りの挨拶をする。

「あらあら、お帰りなさ、い？」

サーシュ様のお母様だろうか、こちらを見て固まる、仕方ないだろう。

勇者は簡単に人を傷つけられる、だから。

「サーシュ、その子は勇者……よね？」

お母様の確認だ。

「母、勇者とかそんなことどうでもいいだろう、アリアは子供で、俺と同じ子供だ

だから一緒にいてやるんだ、だから！」

「そうね、そうよね、子供だものね」

そういつて、お母様が近づいてきて、私とサーシュ様と一緒に抱きしめた。

暖かった、涙が止まらない。

「アリアちゃん、でよかったかしら、ごめんなさい、私たち大人が間違ってたわ」

「そ、そんなことないです」

「ふふ、アリアちゃんは、いい子ね」

そういつてお母様は私の頭をなでくれる。

サーシュ様のお母様はサーシュ様と同じでとても暖かい、そう思った。

サーシュ様とお母様がお話している、何の話だろう？

「そうだ、お腹すいてるでしょ、準備できてるわ、アリアちゃんも一緒にどうぞ」

「え、あ、えっと、でも」

ど、どうしよう、どうすればいいのかな？　そう思ってサーシュ様のほうをちらちら見てしまう

「母が、いいって言っているのだから、いいんじゃないか？」

「は、はい、サーシュ様／＼」

「え？　ちょっといいかしら、サーシュ」

そういつて、お母様がサーシュ様を手招きする。

また、サーシュ様とお母様がお話している。
それはすぐに終わった。

「アリアちゃん、ついてきて、一緒にお食事しましょ」

「は、はい、お、お母様」

凄く緊張する。

「アリアちゃん、そんな他人行儀名呼びかたしなくてもいいのよ？
お母さん、て呼んで？」

「あ、えっと、お、お……母……さん」

「うふふ、よろしくね、アリア」

お母さんが私の名前を呼んでくれた、凄くうれしかった。

サーシュ様とお母さんの二人に挟まれて食事をした。
お母さんの料理は凄くおいしかった。

食事が終わり。

いまは、サーシュ様と一緒にベッドで寝ている。

サーシュ様と一緒に外で寝たとはいえ、お腹がいっぱいになって
凄く眠たい。

「アリア、おやすみ」

サーシュ様が抱きしめてくれる。

「はい、おやすみなさい」

いい夢が見れそうです。

そうして、一日が終わった。

3話

アリアがうちに来て2年、5歳になった、サーシュです。

あれから2年、俺もだいぶ成長したものだと思う、それからだ**いぶ**恥ずかしいことが分かった。

どうやら俺は、孤児と勇者を勘違いしていたらしい、それに気づいたのはこの世界にどれだけ孤児がいるのだろうと母に聞いたときだ。

母さんは、孤児は世界に一人しかいないといった、そんなわけないだろうと、孤児などもっと**い**るはずだと思い、なぜそんなことが分かるのか聞いてみた。

すると母さんは、魔の王を倒すのは昔から孤児と決まっていると**い**った、この時、あれ、俺ってもしかして重大な勘違いしてる！！と気づいたのだ。

そうして、孤児と勇者を勘違いしているのに気づいたのだ！！

今、思い出しても**い**恥ずかしすぎる、消し去りたい過去の汚点だろう、この秘密は墓の下まで持っていくと決めた。

そして今は、本来なら20年計画でするはずだった孤児院を建てている、名前は勇者院だ。

この名前自体は孤児と勇者を勘違いしているときにアリアに孤児院を立てたい**い**いアリアに孤児院とは何か聞かれたときに、親のいない子を集めて育てる場所だ**い**ったためだ。

この世界に孤児院がなかったのでどうに**い**かなったがもう少しで大恥をかくところだった。

ちなみに孤児院はないので、孤児は教会に保護されたりするらし

い。

この勇者院がこんなに早く建てているのはアリアのおかげだ、アリアが魔物を狩り、その魔物から取れた素材を売る。

もちろん俺も手伝った、そうしている内にかなりのお金がたまり、それを使ってこの勇者院を建てているのである。

そして、今日は、魔物狩りの帰りに勇者院の完成度を見によったのだ。

完成予定は、3日後だ魔法というのは便利だな、2週間でシンプルだがそれなりの大きさの家を作れるのだから。

皆、普通の大工の方達なのだが、魔法が補助ではいるだけでこれだからな。

孤児院に入るのは10人程度だ、その中で一番上は10歳で一番下が3歳だ。

どの子も何らかの理由で両親のいない子達だ、俺も片親とはいえ親がいるから完全にはその子たちを理解できないだろうが、努力はするつもりだ。

孤児の子達は今アリアの家に住んでもらっている。

アリアと俺が魔物狩りでそれなりに稼げるようになったら、村の孤児を集めて食事を与えて勉強や魔法の使い方などを教えたりした。最初は孤児院を建てるまで家をどうしようかと思ったのだが、アリアの住んでいた家はそれなりに広かったのでそこで過ごしてもらうことにした。

「おーい、サーシュ」

孤児院の完成具合を見て家に帰っている途中に後ろから声を掛けられる。

「お、ミトかどうしたんだ？」

ミトは俺と同じ年で、ものすごく元気のいい少年だ、いつも元気に走り回っている。

この頃は、剣に興味があるらしい、木剣を振り回しているのを見く見る。

「あれだよ、あれ、もうすぐ家が建つだろ？ それを見てきたんだ！！」

それでだな、大きかったんだ！！」

少し馬鹿の子ですが、いい子なんです。

本当にいい子なんですよ？ 年の下の子にはおやつを分けてあげたりするし。

「相変わらず説明が下手ですね、ミト

サーシュさん、勇者院見てきました、大きな家でしたね、あの形はいいと思います

庭が大体の部屋から見やすいので、小さな子たちが怪我をしたらすぐに分かりそうですし、私はいいい家だと思います」

家はコの字型に作った、小さな子が庭で遊んでいるのが見やのはモデルは幼稚園などだからだろう。

本当はL字型にするかとも迷ったが、もし村に大量に魔物が入った場合、庭で遊んでいる子がいた時に守りやすいと思ったからだ。

まあ、魔物が入ってくることなど滅多にないと思うが。

「小さな子たちというけど、カミナも十分小さいと思うけど」

勇者院を評価してくれたのは魔法使いが持つような大きな杖を持ったカミナと言う少女だこの子も俺と同じ年で魔法、特に治癒に才能があり怪我をした子達をよく治療している。

一番多いのはミトの治療だが。

「ははは、そうだ、カミナもちっちゃいぞ!! 子供だしな、おっぱいがないんだ」

ボカツ

「痛ってー!!」

「なにをいってるの、ばか!!」

カミナは顔を真っ赤にしてミトを杖で殴った。

「なんだよ、本当のことだろ！」

ミトは涙目になりながらいう。

ミトよ、本当のことでも言っていないことと悪いことはあるんだ。

「うるさい、ばか」

カミナはそっぽを向いて、歩いて行く。

「え、おい、カミナ? むむ、何が駄目だったんだ?」

ああ、ミトよお前はやっぱりばかだ。

「ミト、取りあえず追いかけて謝って来たほうがいい」

「ええ！ 俺が！？ うゝん、まあ、サーシュが言うんならそんなんだろう、追いかけて謝ってくるぜ！！」

そういつてミトは走ってカミナを追いかけていった。

ミトには今度デリカシーというものを教えてあげよう。
そんなことを思いながら、帰路に着くのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152y/>

勇者って知らなかったんですマジ勘弁してください

2011年11月18日06時15分発行